

## 博報堂生活総研(上海)、「生活者“動”察 2022」研究成果を発表

### 次の10年、中国生活者は 大都市一極集中ではなく、自分の求める暮らし方に最適な都市へ移住 周辺環境(域)を巧みに運用する「運域」生活者の誕生

2022年に設立10周年を迎えた博報堂生活総研(上海)は、中国伝媒大学広告学院と共同研究を行い、「生活者“動”察」の10回目となる研究成果を本日発表しました。今年の研究テーマは、「次の10年、中国生活者はどこでどのように暮らそうとするのか」です。

国全体として人口がピークにさしかかり、既に人口減少に転じている都市も出てきた中国。一方で流入人口が増え続けている都市も存在します。最新の人口統計では、戸籍を有している都市を離れ、戸籍を持たない別の都市で生活している非戸籍人口\*1が3.76億人存在し、10年前より170%増加(中国国家统计局「第7回全国国勢調査」)しているという実態も明らかになりました。

中国でこれまで国内の移住という点、内陸部から沿海部へ、農村部や地方の小都市から大都市への移住が中心でした。しかし、次の10年間に暮らす都市を変える可能性があるという生活者に、今後はどのような移住形態になりそうかを尋ねてみたところ、これまでのような**大都市一極集中傾向が薄れ、小都市に移住したい、多拠点生活を始めたいといった考え方を示す生活者が出てきていました**(データ1)。

また、2030年には地方都市の生活利便性が北京、上海、広州、深圳などの1級都市\*2並みに向上する、養老施設の進化/発展により介護負荷が低減するといった将来を思い描き(データ2)、これまでのように都市の経済発展状況ばかりを見ずに、歴史や文化、レジャーの充実、気候や環境を重視して暮らす都市を選択していきたいと考える生活者が多いことも分かりました(データ3)。

さらに生活者の変化を具体的に明らかにするために、都市間移住を積極的に行っている生活者にデプスイインタビューと定量調査をした結果、以下の3つの新しい暮らしのスタイルの存在が明らかになりました。

#### (1) 個人のキャリアや自由を重視して**夫婦が別々の独立空間を求めるスタイル**(データ4)

「家庭を優先しすぎて仕事を犠牲にしたくない。(離れて暮らし)子どもや夫と会う機会が少ないからこそ、罪悪感から会う時間を大切にでき、家族関係も上手くいっていると思う。」(Lさん/32歳女性/既婚子有/咸陽市在住)

#### (2) 収入が多少減っても生活コストが低い都市に移り、**生活品質を高めるスタイル**(データ5)

「仕事は(過去の経験も活かせて)とてもやりやすい。生活の質を追及でき、オンとオフも切り替えやすい上、こちらに来てから家もクルマも買えた。」(Yさん/49歳男性/既婚子有/撫順市在住)

#### (3) その時々自分が求める生活リズムで暮らすために、**複数の都市を転々/往復するスタイル**(データ6)

「移住は心身のリズムの切り替え、生活のスピードの調整。移動のストレスはあるけれど、長い目で見たら能力や人生経験を蓄積できてプラスになると思う。」(Hさん/26歳女性/未婚/上海市在住)

これまでの中国では、大都市に移住、または地元の街に留まり、その環境（域）に適応して生きていこうとする「応域生活」を送ることが一般的でした。環境に適応するためには自分らしさを抑えたり、新たな能力やスキルを身に付けたりと、自分を変える必要もありました。しかし地方都市のインフラや利便性が向上し、生活者の価値観も変化する中で、より自分に合った暮らし方ができる都市に移住したり、複数の都市を使い分けたりすることも可能になってきました。そんな居住地域や環境（域）を、より主体的に選択し運用しようとする「運域生活」を目指す生活者がこれからは増えてくると博報堂生活綜研(上海)は見立てました。



\*1:中国では都市ごとに「戸籍」が存在。非戸籍人口とは、戸籍を有している都市を離れ、戸籍を持たない別の都市で生活している人の人口を指す。

\*2:中国では一般的に都市が1-5級までに区分されており、1級都市は北京、上海、広州、深圳を指す。

本日開催された「生活“動察”2022 発表会」ではこのような「運域生活」をする新しい都市間移住生活者の具体像を詳細に紹介するとともに、今後ますます都市間移住生活者が増えた先に中国でのマーケティングを考える際の視点を提示しています。

本発表の簡易レポート（日本語・中国語・英語）、セミナー動画（中国語）をご希望の方は、博報堂生活綜研(上海)までメールでお問い合わせください。

<https://www.shenghuozhe.cn/>

---

【本件に関するお問い合わせ】

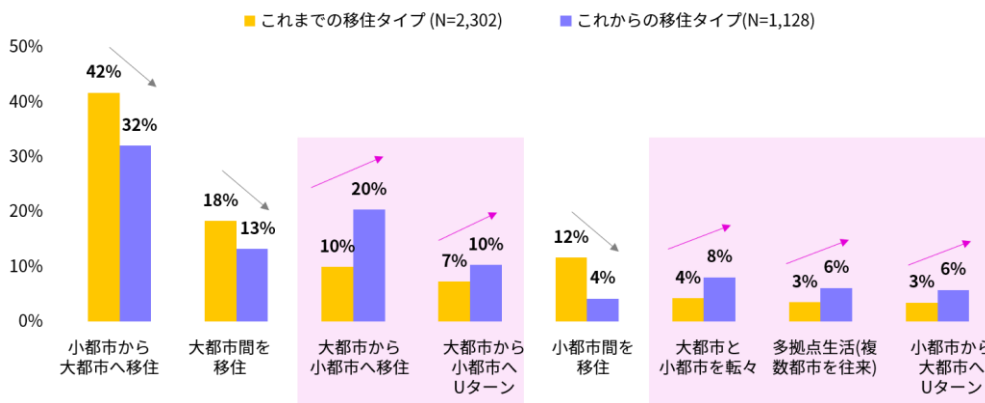
株式会社博報堂 広報室 高橋・フラン・江渡 e-mail: koho.mail@hakuodo.co.jp

## 【データ編】

### データ 1. 大都市一極集中傾向が薄れ、多様な都市間移住を考え始めた生活者

過去に都市間移住を経験した生活者に『これまでの移住タイプ』と、今後 10 年間に都市間移住を検討している生活者に『これからの移住タイプ』について質問した結果、これまでは「小都市から大都市への移住」や「大都市間の移住」が中心でしたが、それに対しこれからの移住タイプは「小都市から大都市への移住」が 10pt 減少し、「大都市から小都市に移住」が倍増する結果となりました。「大都市と小都市を不規則に転々」としたり、「多拠点生活」をしたいと考えている生活者も一定数見られました。

これまでの移住タイプとこれからの移住タイプの比較



(博報堂生活総研(上海) 生活者の移住の現状と将来に関する調査 2022 年 n=5,000)

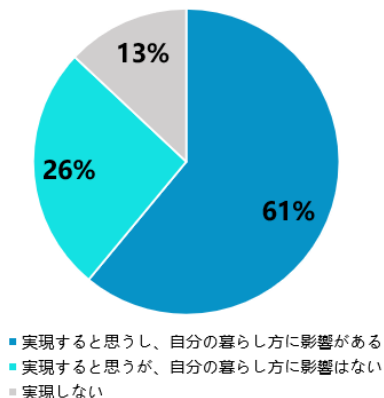
### データ 2. 今後の都市選択を左右する、中国生活者がイメージする 2030 年像

次に、生活者がどのような 2030 年の社会や暮らしをイメージしているのかを把握するために、インフラ、医療、介護、働き方など幅広いテーマについて 2030 年に起きていると思われる予測を提示し、それらが実現していると思うか、自分の暮らしに影響を与えると思うかについて質問しました。

その結果、『2030 年に 2-3 級都市の物流が 1 級都市並みの利便性になる』という予測については、約 9 割が「実現する」と想定し、6 割が「暮らしにも影響を与える」と回答。また『養老施設が拡大/進化し、子に頼らず高齢者自身が自立して過ごせる期間が延伸する』という予測についても、過半数が「実現する」、「自分の暮らしに影響する」と回答しました。

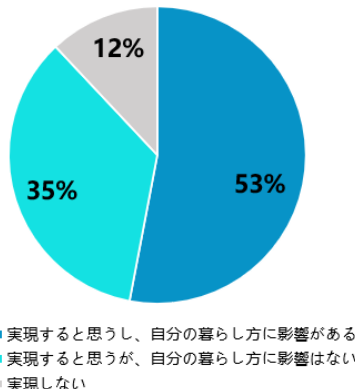
2-3級都市の物流が1級都市並みに便利になる

N = 5,000



養老施設が進化/拡大し、高齢者の自立期間が延長

N = 5,000



(博報堂生活総研(上海) 生活者の移住の現状と将来の移住に関する調査 2022 年 n=5,000)

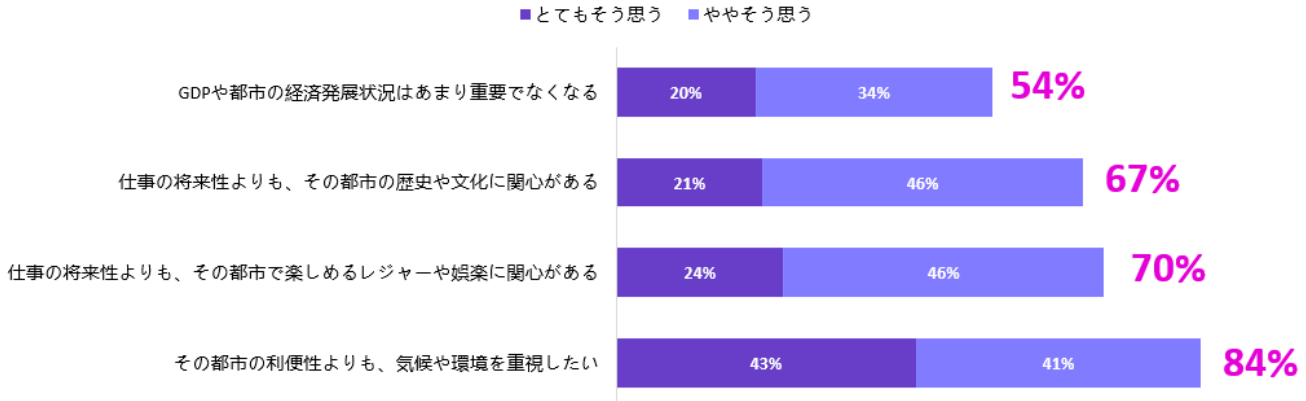
### データ 3. 暮らす都市を選ぶ基準の変化

今後都市間移住を考えている生活者に、移住先の都市を選ぶ際の基準について賛同度合いを調査したとこ

る、『GDP や都市の経済発展状況はあまり重要でなくなる』という意見に過半数の生活者が「そう思う（とてもそう思う+ややそう思う）」と回答しました。また『その都市での仕事の将来性、発展性よりも、その都市の文化や歴史、レジャーや娯楽に関心がある』という意見については、約7割が「そう思う」と賛同しており、『利便性以上に気候や環境を重視したい』という意見については8割以上の生活者が賛同しました。仕事の機会や生活インフラにばかりに注目して暮らす場所を選んでいた従来とは異なる都市選択基準を持つ生活者が出てきています。

今後移住する都市を選ぶ際の基準について

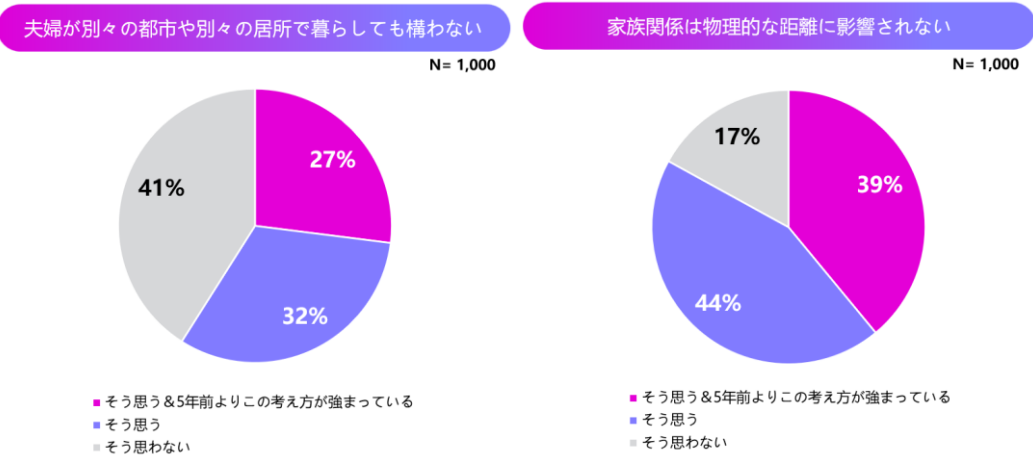
N=1,128



(博報堂生活総研(上海) 生活者の移住の現状と将来の移住に関する調査 2022年 n=5,000)

データ4. 家族での暮らし方に対する新しい考え方の広がり

デプスインタビューの中で、夫婦が別々の都市で暮らす家庭に何度か出会いましたが、私たちはそのような家庭が出てきている背景に家族関係に対する意識変化があると考え、定量調査を行い『夫婦が別々の都市や別々の居所で暮らしてもかまわない』『家族の関係は物理的な距離の影響を受けない』といった考え方にどの程度賛同するのか、以前よりこのような考え方が強まっていると感じているのかについてたずねてみました。調査の結果、『夫婦が別々の都市や別々の居所で暮らしてもかまわない』は6割、『家族の関係は物理的な距離の影響を受けない』は8割以上が賛同し、従来の「家族はまとまって暮らしているべき」という感覚が弱くなっている様子が確認されました。



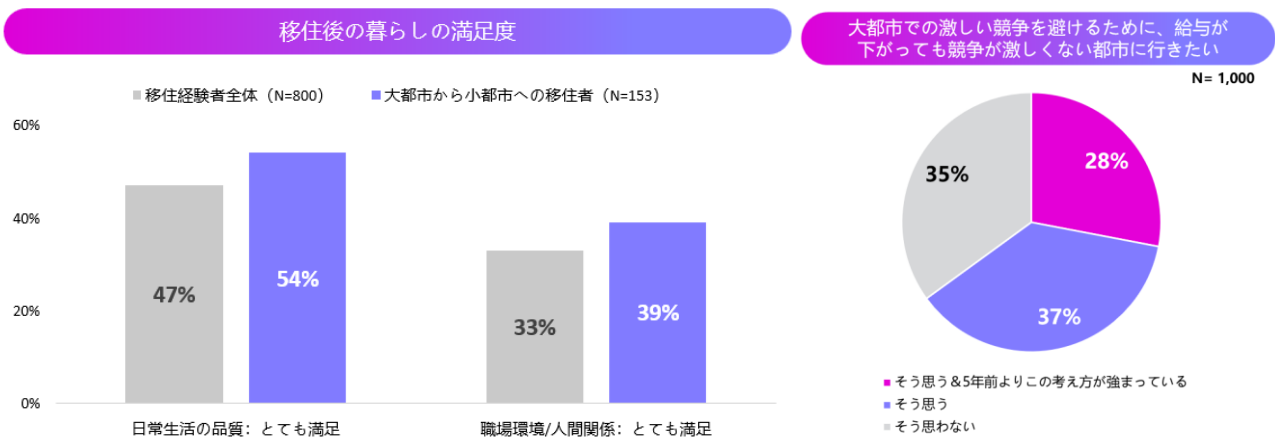
(博報堂生活総研(上海) 価値観および生活スタイルに関する調査 2022年 n=1,000)

データ5. 大都市を離れて地方都市に行くと、そこは暮らしやすい環境だった

大都市から小都市に移住した生活者と、単に住む都市を5年以内に変えた生活者全般で生活の満足度を比

較したところ、大都市から小都市に移住した生活者の方が、日常の生活品質に対して、また職場環境や人間関係に対しても満足度が高くなることが分かりました。

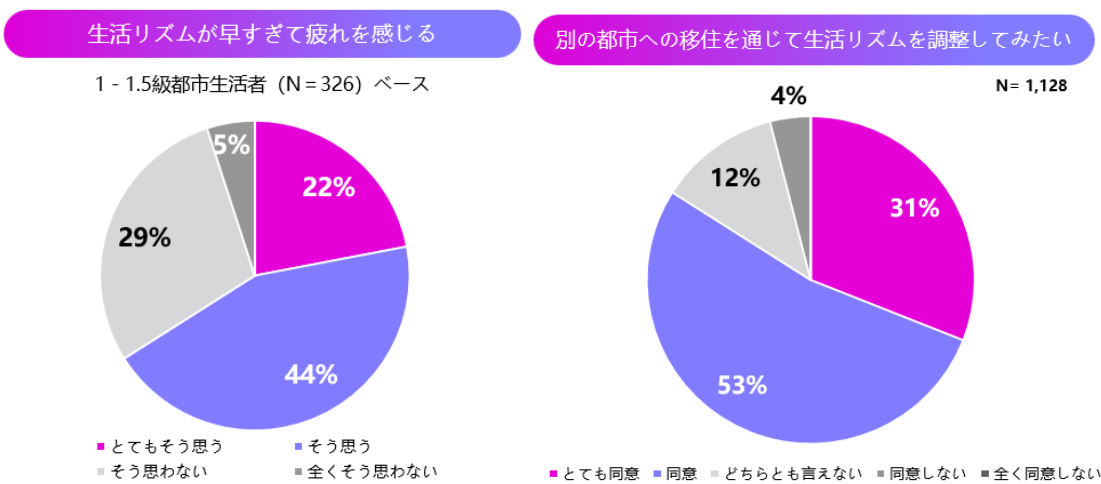
『大都市での激しい競争を避けるために、給与が下がっても競争が激しくない都市に行きたい』という生活者は約7割に達していて、今後働きやすさや暮らしやすさを求めて大都市を離れる生活者の流れは加速するものと想定されます。



(博報堂生活総研(上海) 価値観および生活スタイルに関する調査 2022年 n=1,000)

## データ6. 自分に最適な生活リズムで暮らせる都市に移りたいと考える生活者

『生活リズムが早すぎて疲れを感じる』という問いについては、1-1.5級都市の生活者の約7割が、「そう思う(とてもそう思う+そう思う)」と回答しています。定性調査で出会った生活者の中には、そんな大都市の生活リズムから一度離れるために地方の小都市に移り住み、また英気を養ってから大都市に向かうという人生を歩んでいる生活者が複数いました。実際に定量調査の中で『別の都市への移住を通じて生活リズムを調整してみたいか』を訊ねたところ8割以上が「同意(とても同意+同意)する」と回答し、うち3割が「とても同意する」と回答しました。



(博報堂生活総研(上海) 生活者の移住の現状と将来に関する調査 2022年 n=5,000)

### 【参考資料】

■ 「生活者の移住の現状と将来に関する調査」 調査概要

計 5,000 サンプル

対象者条件：20-59歳の男女 調査手法：インターネット調査

調査時期：2022年8月

調査機関：マクロミル中国

#### ■「価値観および生活スタイルに関する調査」 調査概要

計 1,000 サンプル

対象者条件：20-59歳の男女

調査手法：インターネット調査

調査時期 2022年11月

調査機関：マクロミル中国

#### ■「中国移住生活者インタビュー」 調査

計 30名

対象者条件：過去に2度以上の都市間移住経験、または1年間に複数都市に居住経験を持つ、家庭年収100万円以内の20-65歳男女

調査手法：1対1デプスインタビュー調査

調査時期：2022年8-12月（一部対象者は複数回にわたる聞き取りを行った）

調査機関：インテージ中国

#### ■博報堂生活綜研(上海)

##### Hakuhodo Institute of Life and Living Shanghai

博報堂生活綜研(上海)は、株式会社博報堂の独資子会社として2012年に上海に設立された、中国の博報堂グループのシンクタンクです。日本で蓄積してきた生活者研究のノウハウを生かし、中国における企業のマーケティング活動をサポートしていくと同時に、これからの中国の新しい暮らしのあり方を、中国現地で洞察・提言する活動を行っています。

現在の主要業務は、以下の通りです：

- ・生活者の本質的な欲求を洞察し、新しい暮らしのあり方を提言する「生活者動察」
- ・生活者やマーケットの新しい見方を提示する「新視点提案」
- ・生活者発想を基盤とした企業のマーケティング活動に対する「コンサルティング、提言」

「生活者”動”察」は博報堂生活綜研(上海)と中国伝媒大学広告学院との共同研究発表です。毎年1回の「生活者“動”察」の研究発表は、中国の生活者の行動と欲求の変化を分析し、独自のキーワードを提言します。今回の「運域（うんいき）」は、2013年の「創漩（そうせん）」、2014年の「信蜂（しんほう）」、2015年の「出格消費（しゅっかくしょうひ）」、2016年の「銜能（げんのう）」、2017年の「余楽（よらく）」、2018年の「数自力（すうじりょく）」、2019年の「熱活族（ねっかつぞく）」、2020年の「度物（ドゥオ・ウ）」、2021年の「系遠（シー・ユエン）」に続く10回目の研究成果となります。